

荒海の槍騎兵4

試練の機動部隊

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

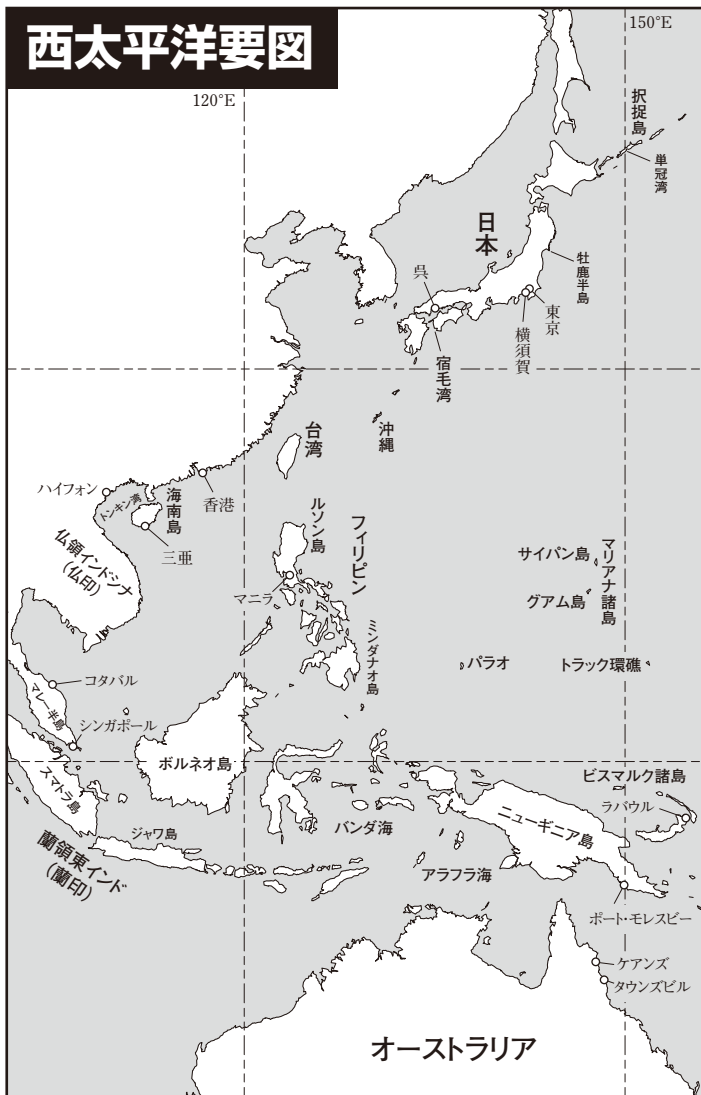
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	巡洋戦艦「大雪」	9
第二章	マーシャル席巻	31
第三章	Dデイの蹉跌	63
第四章	ヘルダイバー猛然	91
第五章	トラック沖の「アイオワ」	163
第六章	指揮官の責務	219

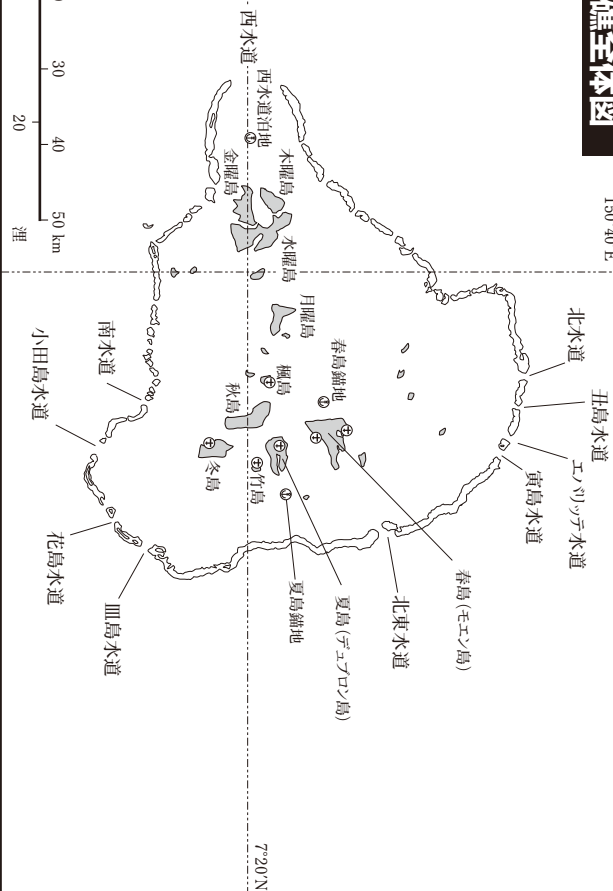


西太平洋要図



トラツク環礁全体図

150°40'E





荒海の槍騎兵 試練の機動部隊 4

第一章

巡洋戦艦

「大雪」だいせつ

1

「奇妙なものだな」

海軍大佐沢正雄さわまさおの声は、内火艇ないかていの後部キャビンに乗っている全員の耳に届いた。

「外観だけなら、どう見ても日本の軍艦ではない。

艦橋かんきょうを始めとする上部構造物の形も、主砲も、我が海軍にはないものだ。そのような艦でも、艦首きくに菊の御紋ごもんを付け、旭日旗きよくじつを掲げると、ちゃんと帝国海軍の軍艦に見える」

「はあ、まことに」

沢と並んでデッキに立つ海軍中佐桂木光かつらぎひかるは、前方に横たわる艦を眺めながら、あまり芸のない答を返した。

横須賀海軍工廠よこすかこうしょうの艤装栈橋ぎそうさんばしに、巨大な軍艦が停泊している。

沢が言った通り、帝国海軍の軍艦とは大きく異なる

形状だ。

中央部には、一番煙突えんとつとほぼ一体化した艦橋があり、その上に三脚橋さんきやくしやうが乗っている。

一番煙突の後ろには、やや小振りな二番煙突が設けられ、その後方には揚収機ようしゅうきと射出機しやしゅうき、飛行甲板はさを挟んで、後部指揮所が設置されている。

主砲塔は、連装三基。

口径は三八センチであり、帝国海軍のどの軍艦とも互換性を持たない。

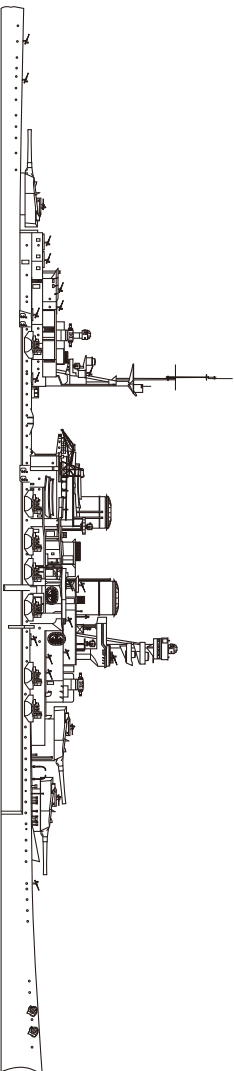
特筆すべきは、対空火器の数だ。

左右両舷りやうげんとも、四〇口径一二・七センチ連装高角砲七基ずつが設けられている他、二五ミリ単装機銃じゆうが所狭しじやせましと並んでいる。

主砲塔の天蓋てんがいにまで、機銃座が設けられている有様だ。

鋼鉄製のハリネズミとも呼ぶべき外観であり、敵艦との撃ち合いよりも、対空火器で敵機を撃墜することに重点が置かれていることがはっきり分かる。

日本海軍 防空巡洋戦艦「大雪」



全長	242.1m
最大幅	27.4m
基準排水量	32,000トン
主機	蒸気タービン 4基/4軸
出力	112,000馬力
速力	28.3ノット
兵装	38cm 42口径 連装砲 3基 6門 12.7cm 40口径 連装高角砲 14基 28門 25mm 3連装機銃 6基 25mm 単装機銃 80丁 水上偵察機 2機/射出機 1基 なし
航空兵装	
乗員数	1,320名
同型艦	なし

もともとは、イギリス海軍の巡洋戦艦リナウン級二番艦「リパルス」である。昭和16年12月10日の「海南島沖海戦」で、米太平洋艦隊とともに日本海軍南方部隊と交戦し、左舷後部に被雷した。

英国艦隊を指揮するフイリッパス大将は、リパルスをシンガポールに帰還させたが、セスター軍港で修理を待つ間にマレー半島に日本軍が上陸。シンガポールを護る英国極東陸軍は昭和17年3月2日に降伏し、リパルスは入渠したまま鹵獲された。

リパルスは横須賀に回航され、日本よりも進んだ技術をもって開発された電探や通信機器、対空装備など、今後の兵器開発に貴重な資料をもたらしている。

その後、127センチ連装高角砲、25ミリ機銃などを満載した「防空巡洋戦艦」として改装され、艦名も「大雪」と改められた。

真横から見た艦体は、非常に大きい。

艦政本部から伝えられた諸元によれば、全長は二

四二・一メートル。

大和型戦艦には及ばないものの、長門型戦艦を二

〇メートル近くも上回っている。

巡洋戦艦「大雪」。

昨年——昭和一七年三月までは「リパルス」の名で呼ばれ、大英帝国海軍の軍籍を有していたが、今年一〇月一四日、改装完了と同時に、日本帝国海軍に編入された巨艦だ。

沢は同艦の艦長に、桂木は砲術長に、それぞれ任ぜられることが、既に決まっていた。

「しかし、珍しいですな」

「大雪」の副長となる木戸武蔵中佐が言った。

江田島卒業後、内務科一筋の道を歩み、多くの軍艦で内務長を務めたという、異色の経歴の持ち主だ。

海軍では傍流とされる道を歩んで来たため、中央での勤務には縁がなく、昇進も遅く、「大雪」の

幹部乗組員の中では最年長となる。

「鹵獲した軍艦を自軍に編入するのは、別に珍しいことではないと考えますが」

航海長の坂本篤夫中佐が言った。

鹵獲軍艦の自軍への編入は、昔から行われていたことだ。今回の戦争では事例が少ないが、日露戦役では、旅順港や日本海海戦で鹵獲された旧ロシア帝国の軍艦が、日本海軍に編入されている。

「私が言っているのは、本艦の艦名です。北海道の地名が付けられるのは珍しい、と思いましてね」

木戸は、自分より若い士官に丁寧な口調で応えた。

「副長の言われる通りですな」

桂木が賛同した。

日本海軍では、巡洋戦艦と重巡洋艦には山の名、

軽巡洋艦には川の名が付けられる。

巡洋戦艦として建造された金剛型や、海南島沖海戦で沈んだ重巡「愛宕」「高雄」などは、この基準に則っている。

最上型、利根型のように、川の名が付けられている重巡もあるが、これらは当初、一五・五センチ砲装備の軽巡として建造が始まったためだ。

それらの中にあつて、北海道の地名を付けた艦は少ない。

現役の軍艦では、軽巡洋艦「夕張」ぐらいのものだが、北海道中央にそびえる大雪山の名が旧「リパルス」に採用されたことで、久しぶりに北海道の地名を冠した軍艦が登場したのだ。

その意味では、木戸副長の言葉通りだった。

「『大雪』という艦名は、本艦に合っているように思いますね」

木戸は目を細めて、近づいて来る巨艦を見つめた。「大雪山は、標高では日本アルプスの山々に及びませんが、幾つもの峰が連なった大きな山ですから。

『大雪』の名は、本艦の大きな艦体をそのまま表しているように思えます」

「確かに大きな艦ですが、上層部は、本艦を艦隊戦

ではなく、機動部隊用の直衛艦として使うつもりだそうですが」

一昨年一二月の、ルソン島沖海戦のような活躍を期待すれば、失望するかもしれない——その意を込め、桂木は言った。

昨年三月、『リパルス』鹵獲の報告が伝えられたとき、海軍中央は快挙に大喜びしたものの、艦の処遇については、すぐには決まらなかった。

英国製の電波探信儀、通信機、対空火器等の装備は、横須賀回航後に取り外され、海軍技術研究所に送られたが、艦そのものの用途については議論が百出した。

「主砲を三六センチ砲に換装し、海南島沖で沈んだ『金剛』『榛名』の代艦としてはどうか」

「今後の戦争を考えれば、空母に改装すべきだ」

「いっそ解体し、資材を新造艦の建造に利用してはどうか」

艦政本部では、連合艦隊や軍令部の参謀も交えて、

活発な討議が行われたようだ。

最終的には、

「主砲塔は、全て残す。対空火器を国産のものに換装し、機動部隊用の直衛艦として使用する」

と決定し、横須賀工廠で改装が行われた。

今は戦時であり、改装に時間と予算はかけられない。海軍中央は、最小限の改装によつて「リパルス」を戦力化する道を選んだのだ。

「時代の趨勢や、我が国の国力を考えれば、防空艦とするのが最も現実的でしょう。海戦の主役は、空母と航空機に移っていますからな」

悟つたような口調で言つた木戸に、桂木は応えた。

「艦隊戦の機会がないとも限りません。昨年九月のウェーク沖海戦のようなことも起こり得ます。空母が敵の水上艦艇に襲われたとき、本艦の主砲は、威力を発揮するはずですよ」

「空母が水上砲戦に巻き込まれるなど、あつてはならないことだ。『大雪』の役割は、対空火器による

空母の護衛であり、主砲は万一の事態への備えだと、私は認識している。私や貴官が『大雪』の艦長、砲術長に任じられたのも、それが理由だろう」

沢が言つた。

沢は防空巡洋艦「衣笠」の艦長から、桂木は同じく「古鷹」の砲術長から、「大雪」への異動を命じられた身だ。

「衣笠」「古鷹」は開戦以来、第六戦隊の第二小隊として行動を共にすることが多く、南シナ海海戦を皮切りに、戦果を上げてきた。

主砲の代わりに、高い射撃精度と毎分一五発の速射性能を誇る六五口径一〇センチ連装高角砲、通称「長一〇センチ砲」六基一二門を装備し、多数の敵機を撃墜して、空母を守つて来たのだ。

水上砲戦では、もっぱら駆逐艦を標的とし、多数の敵艦を屠つた実績を持つ。

第六戦隊の僚艦「青葉」「加古」と共に、「駆逐艦殺し」の異名を持つほどだ。

「大雪」は、対空火器多数の装備により、「防空巡洋戦艦」とも呼ぶべき艦に生まれ変わっている。

沢や桂木が「大雪」への異動を命じられたのは、六戦隊での実績を評価されたためであろう。

(念願叶った^{かな}と思いたいところだが、よりにもよって『リパルス』とはな)

腹の底で、桂木は苦笑している。

江田島卒業後、迷わず砲術を専門に選んだのは、戦艦の砲術長となり、艦隊決戦の立役者^{たてやくしゃ}となる目標があったからだ。

ところが、開戦時のポジションは防空巡洋艦「古鷹」の砲術長であり、主な敵は空母を狙^{ねら}って来る急降下爆撃機や雷撃機だった。

桂木は失望を覚えながらも、「古鷹」砲術長の任務に邁進^{まいしん}した。

「防巡は通過点。目標は、戦艦の砲術長だ」

そのように考えてはいたが、防巡砲術長の任務を全うしなければ、戦艦乗り組みなど望むべくもない。

戦艦の砲術長に任ぜられても、海軍の主力は空母と航空機に移りつつあるのが現状だ。対空戦闘の研鑽^{けん}を積んでおけば、将来必ず役に立つ。

その思惑^{おもわく}もあって、「古鷹」の射撃指揮所で、対空戦闘や水上砲戦の指揮を執^とり続けた。

「古鷹」砲術長から「大雪」砲術長への異動は、その実績が人事局に認められてのことであつたらう。

表面上は、望みが叶ったように見える。

「大雪」の主砲は、三八センチ砲六門だ。門数は少ないが、一発当たりの破壊力は、金剛型や伊勢^{いせ}型の三五・六センチ主砲を上回る。

だが、日本では三八センチ砲弾を製造していない。シンガポールで鹵獲したとき、弾薬庫に残っていた砲弾を撃ち尽くせば、巡洋戦艦としての役目は終わる。

また「大雪」は、機動部隊の直衛艦として戦力化された艦だ。

所狭しと装備した高角砲、機銃で敵機を撃墜し、

空母を守ることが「大雪」の役目なのだ。

防巡から異動しても、任務は変わらない。

いや、対空砲の性能は、「古鷹」の主兵装である長一〇センチ砲の方が、「大雪」の装備である一二・七センチ砲よりも優れているから、むしろ後退したとさえ言える。

一見、栄転えいてんに見える「大雪」への異動だが、手放いつけんして喜ぶ気にはなれなかった。

「俺は、防空艦の砲術長から逃のがれられない運命なのかもしれない」

近づいて来る「大雪」の巨体と、艦橋や煙突の脇に林立りんりつする高角砲、機銃を見つめながら、桂木は口中で呟つぶやいた。

「古鷹」の砲術長に任じられた時点で、海軍における自分の役割と運命は、定まったのかもしれない。

いずれにせよ、決まった以上は是非ぜひもない。

帝国海軍の新戦力となった、かつての英国巡戦に、持てる力を發揮させることが自分の仕事だ。

実績を上げれば、次こそ戦艦の砲術長に任ぜられるかもしれないのだから。

2

呉軍港くれの柱島泊地はしらじまはくちに停泊している第六戦隊旗艦きかん「青葉」も、新たな指揮官を迎えていた。

細面ほそおもての、整った容貌ようぼうの持ち主だ。ベタ金に桜一個、少将の徽章きしょうを付けている。

高間完少将たかまたちつ。

開戦時は戦艦「榛名」艦長の職にあり、海南島沖海戦では、圧倒的に優勢な米英艦隊を相手に一步も退くことなく戦い抜いた指揮官だ。

乗艦の「榛名」は同海戦で失われたが、海南島南東岸の浅瀬あさせに着底ちやくていしたため、生き残った乗員は艦から脱出した後、陸地に泳ぎ着いている。

高間は最後まで「榛名」に残って全乗員の退艦を見届けたことが幸いしたのだろう、艦の喪失につい

て咎めはなく、昨年五月に少将に昇進し、第四水雷戦隊の司令官を経て、第六戦隊司令官に任じられたのだ。

「前任の五藤さん（五藤存知少将。前第六戦隊司令官）から、あらましは聞いている。五藤さんも私と同じ水雷屋で、対空戦闘にはあまり心得がなかったそうだが、優秀な幕僚の補佐を得て、空母護衛の任を全うしたとおっしゃっていた」

「青葉」の作戦室で、幕僚たちと顔を合わせるなり、高間は言った。

「値踏みをするように、三人の幕僚——首席参謀桃園幹夫中佐、砲術参謀穴水豊少佐、通信参謀市川春之少佐の顔を見た。」

桃園の顔を、一番長く見つめていた。

「首席参謀は、五藤さんの下で砲術参謀を務め、独自の訓練計画によって、六戦隊各艦の射撃精度を著しく向上させたそうだな？」

「五藤司令官は自由にやらせて下さいましたので、

私も思い切ったことができました」

桃園は、異動前の第六戦隊司令部を思い出しながら答えた。

開戦時の第六戦隊司令官五藤存知少将も、首席参謀貴島掬徳中佐も、航空関連の職を経験したことはなく、対空戦闘についても十分な知見を有しているとは言いが難かった。

帝国海軍で砲術と言え、水上砲戦のことを指すのが常識であり、対空戦闘などは余技と考えられていたのだ。

六戦隊に所属する防空巡洋艦四隻の砲術長も、水上砲戦を中心に学び、研鑽を積んで来た者ばかりであり、防巡への配属を「左遷された」「出世コースから外された」と考える者までいるほどだった。

一方桃園は、「海軍の主力が空母と航空機になるのであれば、対空射撃も重要性を増す」と考え、砲術学校で、対空戦闘について研究を進めていた。

砲術学校で「変わり者」と評価されていた桃園に

対し、五藤は当初、よそよそしい態度を取った。

江田島卒業後、艦船勤務一筋の海軍生活を送って来た五藤の目には、砲術学校での研究生活が長かった桃園は、「机上だけの軍人」と映っていたのかもしれない。

だが五藤は、頑なな人物ではなかった。

何度も打ち合わせを重ねる内に、「餅は餅屋」と考えるようになったのか、対空戦闘の訓練計画について、桃園の考えを全面的に受け容れたのだ。

結果、防巡四隻の乗員は、開戦までに対空射撃の技術を錬磨し、命中率を大幅に向上させた。

その実力は、南シナ海、ウエーク沖の二大海空戦で発揮され、空母の喪失をゼロに抑えている。

一連の戦闘における実績から、第六戦隊は海軍中央から「功績拔群」との評価を受け、主だった幕僚や各艦の艦長は、栄転という形で異動していった。

司令官の五藤は、海軍水雷学校長に任じられ、首席参謀の貴島は艦政本部に迎えられた。

桃園はウエーク沖海戦終了後、中佐に昇進し、砲術学校の教官に任ぜられたが、同校にいる時間はあまりなかった。

各地の鎮守府を回って、主だった艦の砲術長、分隊長、各艦隊や戦隊司令部の砲術参謀といった人々に、対空戦闘の要領を教えて回ったのだ。

「第六戦隊の防巡四隻は、対空戦闘のみならず、水上砲戦でも抜群の命中率を誇っている。全艦が六戦隊に倣えば、帝国海軍は今まで以上に強くなる」

軍令部次長の伊藤整一中将、第一部長の福留繁少将といった人々はそのように考え、第六戦隊の対空戦闘要領を海軍全体の共有財産とすべく、桃園に教官役を命じたのだ。

鎮守府回りが一通り終わった後、桃園は首席参謀として、第六戦隊司令部に戻ることもあった。

首席参謀となれば、砲術参謀よりも権限が大きい代わりに、責任も重くなる。

状況によっては司令官の代行を務めねばならない

し、砲術参謀や通信参謀を指導する立場でもある。

砲術参謀以上に、桃園の知識と経験を活かせる反面、重圧を感じる役割でもあった。

「六戦隊の指揮については、五藤さんの方針を踏襲するつもりだ。専門家の知識と経験を活かして、任に当たりたいと考えている」

高間はあらたまった口調で言い、三人の幕僚の顔を等分に見渡した。

「微力ではありますが、本分を尽くす所存です」

桃園が、幕僚たちを代表する形で言った。

「今後について、首席参謀の考えを聞いておきたいが」

「米軍の物量に、いかに対抗するか。これが鍵になると考えます」

試すような高間の問いに、桃園は考えていた答を返した。

昨年——昭和一七年九月一日のウェーク沖海戦以降、大規模な海戦は生起していない。

日米戦は、もっぱらラバウルとその周辺における航空戦、及び潜水艦戦によって推移している。

このため連合艦隊の主だった艦艇、特に現代の海戦に不可欠の存在である空母を温存することができ、新型艦上機の配備や搭乗員の養成も、概ね順調に進めることができた。

ただし、これは米国の側にも、戦力を回復する時間を与えたことになる。

対米情報を担当する軍令部第五課が調べたところでは、米軍は昨年の末から、帝国海軍の翔鶴型を凌駕する新型空母や、機動部隊の補助戦力となる小型空母を多数建造しているという。

昭和一八年一〇月現在、正規空母は四隻乃至五隻、小型空母は六隻乃至七隻が竣工したとのことだ。

これらの艦は、来年——昭和一九年の春頃には、乗員の訓練を終え、前線に姿を現すと予想される。

南シナ海海戦、ウェーク沖海戦では、日本側が空母と艦上機の数で米軍よりも優位に立っていたため、

敵に先手^{せんて}を打たれたにも関わらず、勝利を収めることができた。

だが、来年以降の戦いは、これまでとは大きく異なつたものになる。

米軍は、日本軍よりも大きな航空兵力を揃^{そろ}えて、決戦を挑んで来るはずだ。

第六戦隊の防巡が相手取る敵機は、従来の二倍、いや三倍以上に達すると予想される。

今後の訓練計画も、作戦も、その前提で考えなくてはならない。

「三倍以上の敵機、か」

高間は一語一語の意味を確認するように、殊更^{ことさら}ゆつくりと桃園の言葉を繰り返した。

顔色が、幾分^{いくぶん}か青ざめている。

米軍が巨大な物量を投入して来ることは覚悟^{かくご}していたが、対空戦闘の専門家の口からはつきり聞かされると、動揺^{どうよう}せずにはいられないようだ。

桃園の隣に座る穴水砲術参謀、市川通信参謀は、

高間が着任して来る前に既に話をしていたため、驚いた様子を見せなかった。

桃園は言葉を続けた。

「空襲^{くうしゅう}に際しては、複数の艦が同時に敵機の攻撃を受ける可能性が想定されます。注目したいのは、ウェーク沖海戦の戦訓^{せんくん}です。この海戦では、空母と共に、六戦隊の防空艦が敵機に狙われました。敵も、青葉型、古鷹型を強敵と認めたと考えられます」

「空母を守るだけではなく、自艦を守することも重要になる、と？」

「それだけではありません。米軍の巨大な物量を考えた場合、防空艦と空母への同時攻撃といった事態も起こり得ます。敵には、それを可能とするだけの戦力がありますから」

「最悪の場合、我が身を犠牲^{ぎせい}にして空母を守るか、自艦の守りを優先するかの二者択一^{にしゃたくいっ}を迫られるというのが貴官の主張か？」

「最悪の場合ではなく、そのような事態は確実に生

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。